



コミュニティの水脈を探る

——移動性と領域性の歴史比較研究に向けて——

阪口 毅

(コミュニティ政策学科教員)

はじめの問題意識

今から10年と少し前、私が大学1年生の頃、あるフランスの右派政治家の大物が、アフリカ系のルーツを持つ選手が多く所属していたサッカーの自国代表チームに対して、「あんなものはフランス代表ではない」と発言した。私は何よりも衝撃を受けたのは、発言の内容それ自体ではなく、私的空間ではなく公共空間において政治家がそのような発言をしまえること、そしてそれ以上に、その発言が彼の支持層から一定の同意をもって歓迎されたことだった。それから10年が経ち、排外主義的な言説は当たり前のように流通し、それがむしろ政治的な掛け金となるような状況になっている。

「われわれ」と「それ以外」の人間を区別するのは、人類の歴史において普遍的な原理であり続けてきた。これは社会科学の概念で言い換えれば、コミュニティの境界 (boundary of community) の問題ということになる。しかしその境界は、いついかなる時も不変不動の実体として存在し続けてきたわけではない。現実の人間の実践において、境界は幾度もつくり上げられ、またつくり直されていくものだからだ。近代に発明された国民国家は、実体としての領土 (territory) を設定し、歴史的地域を「国土」として、身分やエスニシティを「国民」として包摂する、強力な領域性 (territoriality) を伴っていた。これは多様な差異を乗り越えて一つの社会を誕生させるという願望であると同時に、そこに包摂されない「他者」との間に鋭い境界を生む反作用を持っていた。人々の間にある差異が包摂されるためには何らかの領域性が必要となるが、その領域性そのものによって排除が生まれる。この両義性を解くカギは一体どこにあるのだろうか。

もちろんこうした問題意識が、はじめから明確な形をなしていたわけではない。大学入学時点で持っていた素朴かつ不定形な問題意識が、社会学を学び古典や先行研究と向き合うなかで、具体的なフィールドでの調査を続けるなかで、そしてそれ以上に、ゼミの先輩・同期・後輩たちをはじめとする「研究仲間」たちとの

対話を通じて、次第に明確な形をとるようになっていった。

乗り越えるべき「壁」

研究者としての私を形づくったのは、学部入学直後の基礎演習（1年次のゼミナール）から博士課程修了まで10年間の指導を賜った、新原道信先生である。私は大学のパンフレットを読んで、はじめから先生に弟子入りしたいと思って進学したので、偶然にも基礎演習の担任となって頂いたのには心底驚いた。イタリア・サルデーニャ島を主要なフィールドとし、都市・地域社会学、社会運動論、島嶼社会論などの専門家として知られるが、何より心惹かれたのは、「自分の狭い枠から出て、たった一人でフィールドに立て」という言葉だった。頭でっかちで他人と関わるのがそれほど得意ではなかった私にとって、自分一人で考えているだけではダメだというメッセージは、自分が研究者としてやっていけるのかを試すための道を、示しているように思えたのだ。

学部2年生になり、先生のゼミナールにも「もぐり」で参加していた私は、自分の卒業論文までのフィールドとして、東京のインナーエリア、新宿・大久保地域を選んだ。当時からニューカマーの「コリアンタウン」として知られていた大久保地域は、コミュニティの領域性をめぐる問題を考えるうえで相応しいフィールドだと思われた。この地域で活動する市民団体へのインタビューをきっかけとして参与観察を開始し、これは現在まで続いている（今は完全な当事者となっている）。

大久保地域の調査において、もっとも重要な先行者は、立教大学の教員でもあった、都市社会学者・奥田道大先生の研究グループである。学生たちの個別訪問によるアンケート調査と本格的な参与観察によって、多くのモノグラフが生まれた。転任先であった中央大学の社会学研究室では、学生たちが残した膨大な卒業論文や修士論文を閲覧することができる。私は大久保地域での調査をはじめるとあって、研究室に通い詰めてこれらをすべて読み込んだ（正直に言えば指導教員に「すべて読むように」言われたのだ）。数百ページにわたる文字通り「分厚い」モノグラフ、その背後にある学生と当事者たちとの生身の人間同士の交流に圧倒された。自分にも同じことができるだろうか。そのうえ中央大学で修士論文を書いた学生たちは、誰一人として研究者にはならなかったのだ。これを超えなければプロにはなれないのだと戦慄したことを覚えている。

フィールドから／で学ぶ

文字通り「たった一人で」全く得意ではないフィールドでの参与観察を続けるなかで支えとなったのは、同じような密度で異なるフィールドに入っていたゼミの先輩や同期たちだった。フィールドへの入り方、人との関わり方、フィールド

ノートの書き方、資料の整理の仕方、分析の方法、モノグラフのまとめ方など、全ての工程を、ゼミの「研究仲間」たちと持ち寄りて練り上げていった。さらに自主読書会を開いて、共通の理論枠組みとして、奥田先生の『都市コミュニティの理論』から『都市コミュニティの磁場』に至る一連の著作や、新原先生と交流のあったイタリアの社会学者、アルベルト・メルッチ（Alberto Melucci）の『現在に生きる遊牧民』『プレイング・セルフ』を読み込んだ。理論書を読みながらフィールドでの知見を議論しあうことで、私たちは不格好であっても「自身のものの見方」をつくり、参与観察によるモノグラフを編んでいった。

卒業論文では、大久保地域における人の移動の歴史と、市民団体が主催するシンポジウムや祭などのイベントの展開過程をモノグラフにまとめた。奥田先生の「都市コミュニティ」概念を参照して、地域に対する意味付与が異なる複数の人びとが、一つのイベントを開催していくなかで、どのように共通の理念を作り上げていくのかを明らかにしようとした。しかし最終的に辿り着いたのは、奥田先生が「コミュニティ形成」の基盤とした「共有された価値」それ自体は、「そのつど」作り直されるものであり、実体としての理念を探し求めるのではなく、それが生み出される過程とその歴史社会的条件を明らかにしなければならないという結論だった。

卒業論文で辿り着いた新たな「問い」に取り組むために、参与観察をさらに継続し、その知見を分析するための理論的枠組みと方法論の整備を行うことが、その後の課題となった。修士論文では市民団体主催イベントの完全な運営者として、理論的分析を欠いたモノグラフをまとめることしかできなかった。博士課程では、現在のフィールドでもある東京郊外、立川・砂川地域の公営団地や「砂川闘争」の資料館づくりの活動にも関わるようになった。とりわけ後輩学生たちと共にやってきた団地自治会イベントへの参与観察を通じて、大久保地域の知見を相対化し、イベントを認識媒介としてコミュニティの移動性（担い手の移動と交代など）と領域性を分析するための理論枠組みを作り出すことができた。この成果は、地域社会学会や都市社会学会で発表されている（阪口 2013;2015）。いずれの学会でも「若手の挑戦」に対して真剣な厳しさをもって議論して頂いたことに感謝している。

移動性と領域性の歴史比較研究に向けて

2016年7月に提出した博士論文は、10年間にわたる新宿・大久保地域での調査研究の集大成となる都市エスノグラフィとなった。これは理論的には、コミュニティ研究における既存の三つの理論的アプローチを統合する試みとなった。すなわち、(1) R. M. マッキーヴァーや初期シカゴに代表される制度アプローチ、(2) L. ワース以降の論争の乗り越えを試みたネットワーク論、(3) E. デュルケムを

参照しコミュニティの象徴性に焦点をおく構築主義アプローチである。

私はこれらのアプローチを参照しつつも還元主義を回避し、コミュニティを三つの位相——制度的 (institutional) / 関係的 (relational) / 象徴的 (symbolic) ——の動的連関として分析することによって、特定の時間と空間において生起する複数の「集合的な出来事 (collective event)」において、各位相の領域性がどのように変化し、また相互連関しているのかを明らかにした。現代の都市社会において、所与の実体として強固な領域性を持つコミュニティは永続しえないが、特定の局面において、三つの位相は一体となり「一時的な体制 (temporal formation)」を形づくるのだ。

今後はこうした理論的知見を、他の歴史社会的条件を持つフィールドとの比較によって検証していきたいと考えている。とりわけ「強固な実体」と見なされていた前近代社会においても、コミュニティは不変不動ではなく、これらの三つの位相の動的連関として分析されるべきものではなかったのか。担い手が入れ替わったとき、あるいは移動してきたとき、各位相の領域性にはどのような変化がもたらされ、また新たな領域性が生み出されていったのか。そうした変化を促進したり阻害したりする要因は何だったのか。そして何より、人びとの移動性と差異との出会いに対して、私たち人類は、どのように応答してきたのだろうか。いかなる場所においても伏流水のように存在する、あるいは私たちの社会的身体の奥底に刻まれた、コミュニティの水脈を探究したいと考えている。そこに、本質主義に陥ることなく「生かし直す (reappropriate)」(R. N. ベラー) べき伝統があるのではないだろうか。

【文献】

- 阪口毅 (2013) 「『都市コミュニティ』研究における活動アプローチ——大都市インナーエリア・新宿大久保地域における調査実践より」『地域社会学会年報』25 : pp.77-91
- 阪口毅 (2014) 「移動の歴史的地層」新原道信編著『“境界領域”のフィールドワーク——“惑星社会の諸問題”に応答するために』中央大学出版部 : pp.289-333
- 阪口毅 (2015) 「『都市コミュニティ』の創発性への活動アプローチ——大都市インナーシティ・新宿大久保地区の市民活動を事例として」『日本都市社会学会年報』33 : pp.105-122.
- 阪口毅 (2016) 「『都市コミュニティ』の移動性と領域性に関する調査研究——インナーエリア・新宿大久保地域と『集合的な出来事』のエスノグラフィ」博士学位論文
- 阪口毅 (2017) 「『都市エスニシティ』論以降のコミュニティ研究——『場所』と『出来事』の比較研究序説」『中央大学社会科学研究所年報』21 : pp.117-140.